

遺物の復元

—色を付ける—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



志野向付 (上京区室町通樺木町下る大門町出土)



黒織部沓茶碗 (中京区烏丸通竹屋町下る少将井町出土)



織部沓茶碗 (中京区烏丸通二条下る秋野々町出土)



黄瀬戸鉢 (中京区三条通麩屋町東入弁慶石町出土)

発掘調査では、遺跡から様々な遺物が出土します。そしてこれらは、過去の暮らしや文化を知る大きな手がかりとなります。しかし、土器をはじめとして、遺物はその大半がバラバラの破片の状態が出土します。そこでそれらを接合し、石膏などで不足している部分を補うなどの作業を行ない、土器を復元します。色づけは、この復元作業の最後の段階です。

上の写真を見てください。破片の接合がすんだ段階のものと、色

づけを行ない、復元が終了したものとを並べてみました。どこが復元した部分か見比べてください。資料館などに展示してある遺物も、そのほとんどが、こうした復元を施したものです。これは、元の姿をより多くの人に理解してもらおうようにと考えて行なっています。

土器には様々な種類のものがあります。色づけといっても、どの土器にも同じように色を塗るだけではありません。土師器や須恵器のように、表面がざらざらしてい

て光沢のないものや、陶磁器のようになめらかで光沢のあるものなど、色づけもその土器の材質にあった方法で行ないます。

土師器や須恵器の場合には、主にポスターカラー（水彩絵の具）を使います。これは、水彩の泥絵の具が土師器や須恵器の持っている質感に近く、ざらっとした手触りを出しやすいからです。

釉薬のかかった陶磁器の場合には、アクリル絵の具を使います。アクリル絵の具とは、顔料をアク



写真1

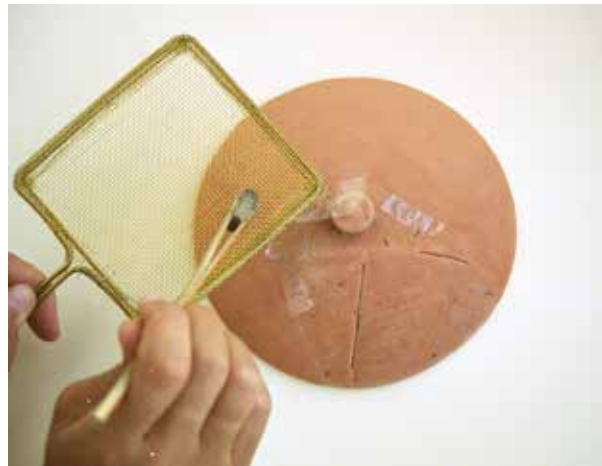


写真3



写真2



写真4

リル樹脂で溶いた水溶性の絵の具ですが、乾くと耐水性になり表面がなめらかになります。さらに補助剤（グロスメディウム）を重ね塗りすることによって、ガラスのような光沢を出すことができます。

また絵付けのあるものは、筆の運びを大切に、土器全体をイメージしながら図柄を再現していきます。土器の表面にある細かい凹凸は、陰影などで表現します。

さらに土器の表面には様々な文様、製作技法の痕跡、キズなどがあり、これらも色つけによって表現することがあります。いずれの場合にも、遺物本体はもちろんのこと、同じような資料を参考にし、本体とのつながりを考えながら

作業を進めます。

ここで、実際の作業を土師器の場合を例にとり説明します。まず絵の具を何色も混ぜて下地の色を作り、石膏部分に塗っていきます。本体の色が部分によって異なる時は、色を変えながら塗り分けます。絵の具に補助剤（モデリングペー

スト）を少し加えて素焼きの質感を強調します（写真1）。地色ができたらタタキ筆で微かな色の変化を付けていきます。タタキ筆とは毛足が短くて硬い染色用の筆で、ぼかし気味に塗っていきます（写真2）。

本体を透明テープ等で保護し、金網とタタキ筆を使って絵の具を霧状にとばして細かい粒を付け、

質感を出します（写真3）。

細かい部分を描いて仕上げます。特に本体との境目をていねいに描きます（写真4）。

須恵器の場合も、ほぼ同様に行ないます。復元後は展示するものと写真に撮って保存するものがあります。展示用には絵の具の中でもできるだけ紫外線や空気による変色の少ないものを選んで使います。全体の作業は遺物本体を傷つけたり汚したりしないように注意して行ないます。

このように細やかな点にも気を配りながら、出土した遺物を元の形により近いものへと再現していきます。

（出水みゆき・田中利津子）